

# 東京音楽大学リポジトリ Tokyo College of Music Repository

D. H. Lawrence : 小説研究(I)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1978-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-on dai.repo.nii.ac.jp/records/627">https://tokyo-on dai.repo.nii.ac.jp/records/627</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



# D. H. Lawrence: 小説研究 (I)

内 藤 歓 修

## I 作家としての船出—*Sons and Lovers* まで

最初の長編 *The White Peacock* を書き始めたのは、D.H.Lawrence が二十一歳 (1905) の復活祭の日であった。初恋の人 Jessie Chambers の手によって、「女王様が綱を切って、船を進水させる様に」文壇に船出してから、少したった1911年に Heinemann 社から出版された。

彼はこの作品を書くに当って、Jessie の意見を聞いては書き直すといった苦心をしたが、小説で最も影響を受けたのは、George Eliot の作品の手法である。Jessie は Lawrence が次の如く言ったと記録している(注1)。

“The usual plan is to take two couples and develop their relationships,” he said.  
“Most of George Eliot’s are on that plan. Anyhow, I don’t want a plot, I should be bored with it. I shall try two couples for a start.”

「普通のやり方は、二組のカップルを選んで、その関係を発展させていくことだ」と彼は言った。「ジョージ・エリオットの大部分の作品はそのやり方にのっとっている。兎に角、僕は筋はいらない。それにうんざりするだろう。先ず二組のカップルをスタートさせてみよう」

(筆者訳)

尚、初めは *Nethermere*(注2)という題が付けられた。

確かに、ここでは二組の恋愛が展開する。一組は農夫の子 George Saxton と語り手 Cyril Beardsall の妹 Lettie で、他方は Cyril と George の妹 Emily である。Saxton 家は現実の Chambers 家、Emily は Jessie である。だが、main plot は飽く迄、George と Lettie の関係であり、Cyril と Emily との関係は sub plot に留っている。Cyril—Emily 即ち Lawrence—Jessie の関係は、*Sons and Lovers* に於いて真正面から扱われる事になるが、ここでは影薄いものになっているのは、Lawrence が母の強い影響の下にあって、自分の恋愛にぶつかってゆくだけの勇気がなかったのであろう。この物語では人物などの素材はすべて、Lawrence 自身の周囲から採られているのだが、それを realistic に見ていくのを避けている様だ。例えば、Cyril の姓が Beardsall で Lawrence の母の旧姓を用いているのは、自分と父との関係を拒否している現われであろうし、Lawrence にとって余りに大きい存在であった母もやはり影の存在となっている。更に、注意すべきは、これらの人物の属する階級が、実際は労働階級にも拘らず、Saxton 家以外は裕福な中流階級である。

これは小説の構造から見れば、Cyril と Lettie は自意識的で、自分の思想を明確に述べ得る人物でなければならなく、労働階級の人物をこんな風に描いたら、可成りおかしなものになってしまふ為に、なされた処置で、これにより Lawrence は階級上の不自然さを避けたのであろう。尤も Lawrence 家の人々は父以外は労働階級を軽蔑し、知識階級に憧れていたから、その憧憬を *The White Peacock* に実現したとも考えられる。だが、父だけは知識階級に成り得なかつたので、物語の初めで死んでしまっていると思われる(注3)。

主要人物のこの様な描き方と共に、その背景の描写も、炭坑町に代表される暗い面は殆んど出て来ない。すべてが牧歌的田園の明るい風景に彩られている。それ故、美しい自然描写には圧倒的魅力がある。だが半面、現実から遊離してしまっており、労働階級から知識階級に格上げされた Beardsall, Leslie Tempest, Mrs Beardsall, Lettie などの描き方は、浅薄、お手軽で、農夫 George がしっかり描かれているのと鋭く対照をなしている。この様に人物と背景は遊離し、その社会組織は曖昧で、不自然に見える事は多いが、極めて鋭い観察が屢々見られる事は注目に値する。

また、この作品には Lawrence が後になって、充分に展開して見せてくれる重要な問題が、単純な歪められた形で現われている。尤も、Lawrence が、後の作品で目を向ける様になった潜在意識という未知の探索など全く見られない。ここで分析もされずに、無意識的に出て来る主題を挙げてみれば、後の *Sons and Lovers* で扱われる Lawrence の父母の関係は、間接的に、中心人物 George が、失恋の後伯母の娘 Meg と結婚し、そこに生まれ、破滅に導かれる夫婦生活に暗示されている。また土に固着し、鈍重で、どろくさい、自分の考えも碌に言えない男—George—と、自意識的で、程よく敏感で、教養もある男—Leslie—との、一女性をめぐっての葛藤、自分自身の生命力を欠き、潜在能力を否定する男—George—の没落、挿話的に登場するだけだが、現代的な女性と彼等の基準に激しい憎悪を抱き、“Be a good animal, true to your animal instinct.” (よき動物となれ。自分の動物本能に忠実であれ) と説く獵場番 Annable、男 Cyril と男 George との男性同士の性愛的関係、Cyril と Emily との関係、父ひいては権威一般に対する憎悪など、枚挙に暇がない程数多くある。だが、これ程有り余る材料を抱えていても、Lawrence は main plot である「Lettie と二人の求婚者の話に従属させる常套的小説構成」は充分に支えてきた。

Lawrence の後の作品になると、George と Leslie の関係は根源的で健全な魂を持つ男対青白い自意識的な男という関係になり、前者が後者に打ち克つ様になる。Annable は *Lady Chatterley's Lover* の Mellors の先駆で、Annable の前身は Cambridge で学んだ牧師であり、妻は虚栄心に蝕まれた、意志の強い、精神的な女であった。彼女は破壊的な女で、Annable にとって「虚栄と金切り声と不潔」の化身である。彼が彼女を孔雀のような女だと言うと、Cyril がそれを白孔雀と言い直した。孔雀の象徴は Annable と Cyril の対話に出て来るだけでなく、第二部第二章の廃寺の墓地の場面で、現実の孔雀の姿となって物語に出て来る。また、Lettie もこの白孔雀であった。後の Lawrence の作品には、この様な自分の意志を他に押しつけてゆく知識人振った自意識の強い女性がよく登場し、彼の攻撃的になる。炭坑支配人の息子である Leslie は *Women in Love*

の Gerald, *Lady Chatterley's Lover* の Criford の前身でもあろう。

一方、ここに登場する人物の最期を見てみよう。Meg と結婚した後に、一度は社会的に成功したが、結局心身共に絶望状態に陥ってしまう George, 社会的地位のある Leslie と結婚後、虚飾に満ちた中産階級に溺れ、社交と子供の養育に自己を失ってしまう Lettie, 近代文明を呪い、石切り場で転落し、死亡してしまう Annable など、自分の願望を遂げる事が出来ず、人生の敗北者となる者が多い。この様にこの作品には、Lawrence がこれ以後発展させていく登場人物の原型となる人物が姿を現わしている。そしてその原型となる人物は、大きく三種類に分けられると考えられるので、ここに簡単な表を書いてみよう。彼の時期の早い作品ではⅡ型の人物が勝利をおさめ、Ⅰ型の人物が敗北という図式になるが、時を経るにつれて、その逆の関係が表われる。又、Ⅰ, Ⅱ, Ⅲの型にうまくおさまらず、その型のいくつかを合わせ持つ人物が登場してくるのである。

型	性 質	人 物
自然型（Ⅰ型）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・原始生命を保有した自然人。</li> <li>・性的健康。</li> <li>・生命から湧き上る性を保有。</li> <li>・無意識なる肉体を所有。</li> <li>・黒褐色の毛髪、又はヒゲをはやし、しばしばやせているが、何処かに鋭い生命力の奔りを感じさせる肉体の持主。</li> </ul>	Lawrence の父親, Annable, George, Mr Morel, Meg, Siegmund, Loerke, Don Cipriano, Gipsy
知性型（Ⅱ型）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文明化され、機械化されたヨーロッパ的知性人。</li> <li>・性的不健康。</li> <li>・単なる刺戟的な性感しか感じていない人間。或はそれすらも感じられない不能者。</li> <li>・意識せる精神。</li> <li>・皮膚は白色、ブロンドの髪、筋骨質で頑健、又はごつごつした肉体の所有者。</li> </ul>	Lawrence の母親, Leslie, Helena, Mrs Morel, William Morel, Miriam, Anna, Anton, Gerald, Hermione, Christina, Crich, Cooley, Ramón, Criford (I + II型) William Brangwen, Ursula, Birkin, Thomas Crich, Aaron, Lilly, Somers, Mellors
中立型（Ⅲ型）	I, IIの両者に通じ、I, IIのどちらとも結びつく可能性を有しているが、そのデリケイトな感受性のために常に受身に立って I, II両者から牽引されている人物。	Lawrence 自身, Cyril, Paul, Constance

前述のように表面上の筋の結末は余り幸福な姿とは言えないが、この作品の読後感は絶望的な暗澹たる印象ではなく、若々しさと新鮮さと柔軟さとの印象である。これがこの *The White Peacock* の最大の魅力の一つとなっているのであろう。

Croydon の Davidson Road School の教師になった Lawrence は同じ Croydon の別な小学校に勤めていた女教師 Helen Corke と親しくなる。或る時、偶然彼女の日記形式によるノートを借り、それを素材にして彼は一つの小説を書き上げた。最初 *The Saga of Siegmund* と名付けられ後に *The Trespasser* と改題された作品である。これを早速 The English Review の編集者 Ford Madox Hueffer に送ったが、彼は ‘The book is a rotten work of genius. It has no construction

or form—it is execrably bad art, being all variations on a theme.’<sup>(注4)</sup>（「この作品は」と彼は言いました、「天才のがらくた仕事です。それには構成もなければ形式もない——それは一つの題目についてのあらゆる変化であって、呪うべき拙劣な芸術です。）と酷評したので、Lawrence は出版を断念した。だがそこへ Edward Garnett が現われ、Hueffer が酷評したのも必ずしも不当でないとしつつも、敢えてこれを「大変刺戟に富んでいる」と褒めて、Duckworth 社から出版する事を勧めたので、1911年冬、Bournemouth で病氣療養中書き改め、翌年一月に完成した。同じノートを Helen も素材にして、1933年、*Neutral Ground* を出版したのでも分る様に *The Trespasser* は、彼女の文体が多分に影響しているらしい。

Helen の直話<sup>(注5)</sup>によると次の様である。*The Trespasser* の最初と最後の二章は現実の出来事の写しであり、それの中の対話は文字通りの記録である。第二章から第二十一章までは、Helen 自身の日記と感想に基づくものであり、第二十二章から第二十九章までは Helen から聞いた話を彼らしく書き直したもので、「ここで Lawrence は自分の想像力を働かさねばならなかった」。更に、第三十章に作者の勤め先の小学校の同僚の素描を挿入したが、それ以外は、この章はすべて“fiction”であった。

この小説の梗概を一言で、作中人物の一人が語っている――

Her husband had got entangled with another woman. She herself had put up with it for a long time. At last she had brought matters to a crisis, declaring what she should do. He had killed himself—hanged himself—and left her penniless. Her people, who were very wealthy, had done for her as much as she would allow them. She and Frank and Vera had done the rest.(Chap. XXX)

「かの女の夫が別な女と関係するようになった。かの女自身は長いあいだこらえていた。最後に事件を危機に陥らせてしまい、自分のとるべき道をはっきりいった。夫は自殺した一首を継った一残された妻は無一文だった。親戚が大金もちだが、かの女が頼んだだけのことはぎりぎりいっぱいしてくれた。あとはかの女とフランクとヴェラでかたづけた」（西村孝次訳）

ここで、“She” とは Beatrice という三十九歳の人妻で、十九歳の Vera, 十八歳の Frank, 十二歳の Marjory, 九つの Gwen, 幼い Irene の母である。彼女とその夫 Siegmund の夫婦生活は全く空虚で “...now, after twenty years, he was almost a stranger to her.”（二十年経った今彼は彼女にとって殆んど他人であった）という状態であった。それ故、自分のバイオリンの弟子である Helena Verden に深い愛情を抱くのには、長い時間はかかるなかった。彼は家庭を棄てる。

そして、その愛情は夏の Wight 島での五日間の朝夕に繰り広げられる。Siegmund は Helena と共に完璧な幸福に酔った。彼は言う――

“In everything else I’m a failure, Helena. But,” he laughed, “this day of ours is a rose not many men had plucked.”  
(Chap. XI)

「ほかのあらゆることでぼくは失敗してるんだよ、ヘレナ。だが」男は笑った、「ぼくらのこの日だけは多くの人間が摘んだことのない一輪の薔薇なのだ」  
(西村訳)

この島での情熱的な生活の描写の中には、後に Lawrence が両性関係の理想状態を示す時の描写に近いものがある。生命の根源と一体となる様な性の意識がここで初めて芽を出している。だがこの理想的状態は長く続かない——

After an intoxication of passion and love, and beauty, and of sunshine, he was prostrate. Like a plant that blossoms gorgeously and madly, he had wasted the tissue of his strength, so that now his life struggled in a clogged and broken channel.

(Chap. XXIII)

熱情と愛の、美の、日光の恍惚が失せると、疲れはてた。豪華に狂ったように咲いている花に似て、力の組織を浪費してしまい、そのため今やかれの生命はふさがれた断たれた水脈のなかでたたかっているのだった。

(西村訳)

Siegmund は家庭を棄てた男として、社会的慣習や道徳に気をとらわれ始める。だが、彼がこうした Helena との行為に対して社会的非難を甘受したとしても、Helena がこの情熱的生活をためらい始めては、どうにもならない。

Helena のためらいは、何が原因となっているのか。それは、彼女の持っている押しつける様な意志であり、強い自我であった——

Being a moralist rather than an artist, coming of fervent Wesleyan stock, she began to scourge herself. She had done wrong again. Looking back, no one had she touched without hurting. She had a destructive force ; anyone she embraced she injured. Faint voices echoed back from her conscience. (Chap. XV)

芸術家というよりもむしろモラリストであり、熱烈なウェズリー派の家系の出なので、自己をきびしく鞭うちはじめた。また悪事を重ねてしまったのだ。ふり返ってみると、これまで触れたひとをきまつて傷つけてきたかの女だった。破壊力があったのだ。誰でも抱擁したひとに害を加えたのだ。かすかな声が良心からこだまして帰ってきた。

(西村訳)

Helena は Siegmund の中に「自分の理想的恋人」を求め、求め切れずに失望した。Lawrence がよく描く、自分の意志を押しつけようとする女性のタイプが彼女である。Siegmund の旧友 Hampson の言う、この様な女は「我々男性の中にある自然なものを破壊する」というのは、Lawrence の考え方であろう。

この作品では、全体的に見て、作者独自の文体が確立していないせいか、人物の立場と問題の所在が曖昧であり、また Siegmund の自殺の様に説得力の乏しい処もあり、「人間」はしっかりと書き込まれていない感がある。だが一旦作者の眼が「自然」に向くと、彼は外界の最も純粹な本質を伝達する柔順な媒体となる。次に引用する文章は Siegmund が朝の Wight 島を散歩する場面である——

He strode along, singing to himself, and spinning his towel rhythmically. A small path led him across a field and down a zigzag in front of the cliffs. Some nooks, sheltered from the wind, were warm with sunshine, scented of honeysuckle and of thyne. He took

a spring of woodbine that was coloured of cream and butter. The grass wetted his brown shoes and his flannel trousers. Again, a fresh breeze put the scent of the sea in his uncovered hair. The cliff was a tangle of flowers above and below, with poppies at the lip being blown out like red flame, and scabious leaning inquisitively to look down, and pink and white rest-harrow everywhere, very pretty.

(Chap. VI)

ひとりで歌いながら、タオルをくるくるとまわしながら、すたすたと歩いていった。小道をたどっていって野原を横切り崖のまえの Z 字形のところに出た。風のあたらない隅々の土地は、日光で暖かく、すいかずらや、たちじやこうそうがにおっていた。淡いバター色をしているすいかずらの小枝を一本とった。草が茶色の靴とフランネルのズボンを濡らした。またもや、さわやかな微風が帽子をかぶっていない頭の髪の毛に、海のかおりを吹きこんだ。崖は上も下も花々が咲きみだれ、縁のところのけしの花は赤い炎のように風になびき、まつむしそうは何かを探り出そうとでもするふうにかがみ込んで下をのぞきこみ、いたるところにピンクと白のはりもくしゅくが咲いていて、たいそうきれいだった。

(西村訳)

Lawrence の初期の作品は、若々しい躍動に満ちてはいるが、熱狂的過ぎる事はない。自然美への楽しそうな讃歌と、人間性の描写に対する喜びとが、同時に存在している。また、後期の作品でも高らかに自然美は歌い上げられているのである。これに反して、性格描写の方は余り評判はよくないと言われるが、決してそんな事はない。彼が描き出した人物で我々が忘れ得ぬ人々は何人でもいる。The White Peacock のウィスキー好きの医者とその妻、Lettie の大人になったお祝いのパーティに来ていた Madie, Marie, Alice などの娘達、The Trespasser の女主人公 Helena の友人 Louisa、生き生きと描かれている汽車の中のドイツ人達、Sons and Lovers の多くの人物達、等々、驚く程鮮かに描き出されているのである。The Rainbow の William, The Plumed Serpent の Don Ramón, Lady Chatterley's Lover の Chatterley さえ、その様な種類の人物である。

さて、母に完全に支配されていた Lawrence の自我は、最早母の自我から逃れる以外に、自由に活動する事が出来なくなっていた。彼がこれから、偉大な作品を生み出そうとするには、母が死ぬ以外道がなかった。幸か不幸か、癌が母を蝕んで1910年十二月に、母は帰らぬ人となる。その時 Lawrence にとっては世界は解体し、茫然自失して自己を喪失してしまった。当然の結果である。今迄母を範とし、母の自我を己れの自我としていたのであるから。

母の死後、多くの女性関係は消滅し、自らは肺病にかかり、学校は辞職し心身共に刀折れ矢尽きた状態となる。どん底からやっとはい上り、母の影響も薄くなった頃、Nottingham 大学の Prof. Ernest Weekley の妻で、Baron Von Richthofen の娘 Frieda と恋に落ちる。色々の障害を乗り越えて、二人は駆落ちの後結婚する事が出来る。ここで母からの解放は決定的となるのである。その間の彼の彼女への恋心や恋慕の情は、詩集 *Look ! We have come through.* によく表わされている。この駆落ちの間に、Lawrence は Sons and Lovers<sup>(注6)</sup>の最終稿を書き上げるのである。

初めは Paul Morel という題の Sons and Lovers は全部で三回書き直した後に完成した。第

一、第二稿は Jessie の批評、助言を、最終稿では Frieda の援助をそれぞれ得て、Lawrence はこの作品を書き上げたのである。だが、最終稿を見ていなかった Jessie は、出版直前の校正刷を見て怒った(注7)。彼女の助言は殆んど入れられていないのであった。Lawrence は彼女を蔑ろにし、母に同情的になって母への自分の屈従を讃美し、母を絶対的なものにしていると彼女は思った。これで Jessie と Lawrence の交際も永久に絶える事になった。Lawrence 自身にしても、この頃には他にも女が出来、二人の仲は元に戻るのが困難になっていたところに、Frieda との出会いで、Jessie との離別は最早決定的なものとなった。尤も、決定稿 *Sons and Lovers* を一読すれば分る様に、この作品は Lawrence 側から見れば、Jessie と自分との世界を強引に切り離そうとする努力であり、Jessie 側から見れば、Lawrence が自分をその世界から追い出そうとする証拠であった。

さて、この *Sons and Lovers* であるが、前の二作 (*The White Peacock*, *The Trespasser*) からは、大きく一步前進している。青年時代迄を送った故郷から、地理的、精神的に遠ざかり、空想上の性生活から、現実の正常の性生活を営み始めたので、Lawrence は自分の過去をより明瞭に、より鋭く、より冷静に、より完全に見つめる事が出来る様になった。

この作品の背景と作中人物の多くは、名前こそ変えてあるが、*The White Peacock* よりはずっと迫力や真実性があり、生き生き描かれている。それぞれの作品の全体の調子は、冒頭の書き出しで、決定的に読者に印象づけられている――

I stood watching the shadowy fish slide through the gloom of the millpond. They were grey, descendants of the silvery things that had darted away from the monks, in the young days when the valley was lusty. The whole place was gathered in the musing of old age. The thick-piled trees on the far shore were too dark and sober to dally with the sun, the weeds stood crowded and motionless. Not even a little wind flickered the willows of the islets. The water lay softly, intensely still. Only the thin stream falling through the millrace murmured to itself of the tumult of life which had once quickened the valley.

(*The White Peacock*, Chap. I)

私は水車場の池の薄暗がりのなかをすべてゆく影のような魚を見つめていた。灰色の魚たちは、この谷全体が若く発刺していたころ、修道僧たちのもとを逃れ去った銀白色の魚の子孫だった。この場所全体が老年のものおもいにふけっていた。向こう岸にあつく生い茂った木々は暗く真面目で太陽とたわむれようともしないのだった。密生した雑草はそよとも動かなかった。小島の柳を揺らすほどの風すらなかった。池は穏やかで、あくまでも静かだった。ただ水車用の水路を流れ落ちる細い水流だけが、かつてこの谷を活気づけた生活の喧噪を呟いていた。

(伊藤礼訳)

“The Bottoms” succeeded to “Hell Row.” Hell Row was a block of thatched, bulging cottages that stood by the brook-side on Green-hill Lane. There lived the colliers who worked in the little gin-pits two fields away. The brook ran under the alder trees,

scarcely soiled by these small mines, whose coal was drawn to the surface by donkeys that plodded wearily in a circle round a gin. And all over the countryside were these same pits, some of which had been worked in the time of Charles II, the few colliers and the donkeys burrowing down like ants into the earth, making queer mounds and little black places among the corn-fields and the meadows. And the cottages of these coal-miners, in blocks and pairs here and there, together with odd farms and homes of the stockingers, straying over the parish, formed the village of Bestwood.

(*Sons and Lovers*, Chap. I)

ボタムズ住宅は、もと、ヘル・ロー部落のあったところに建った。ヘル・ローというのは、グリーンヒル・レーンの小川の傍にあるふくらんだ藁葺きの家の集まりだった。ここに住んでいた坑夫たちは、野原を二つ越えたところにある引き上げ機を使う炭坑で働いていた。小さな炭坑なので、小川はそのために汚されることもなく、赤楊の木の下を流れていた。輪になって、ものうげにとぼとぼと引き上げ機のまわりをめぐるろばによって、これらの炭坑の石炭は地上に引き上げられた。この地方一帯に、これと同じような炭坑があった。そのうちのいくつかは、チャールズ二世の時代から掘られていて、少数の坑夫とろばが、蟻のように地面に穴を掘り、麦畠や牧場の中に奇妙な堆積と小さな黒ずんだ場所を作っていた。

これらの坑夫の小屋は、あちらこちらに、塊りになったり、並んだりして、教区の中に散らばっている小さな農家や靴下製造業者たちの家とともに、ベストウッド村をかたちづくっていた。

(伊藤整訳)

同時に、*Sons and Lovers* は *The White Peacock* より、もっと自伝的要素が強い。Paul Morel は坑夫の息子で、両親は仲がよくない。その反動として母は彼に一身に愛情をそそぎ、彼もそれに応え、二人は深く愛し合う。それ故、母は Paul に出来た最初の恋人 Miriam に嫉妬し、それが原因で Paul はやがて Miriam を棄てる。現実に於いてと同様に、この中でも兄は死ぬ。Paul 自身は画家の卵で、外科医療機械工場の事務員になる。彼は Miriam 以外の女性達とも関係を持ち、Nottingham 市の下層社会とも交渉を持つ。そして最後に母が死ぬ。

父母の対立は、Paul に異常な影響を及ぼした。勿論、前述の如く彼は母に味方したのであったが、その同情に段々変化が表われる。幼い頃は、完全に母の支配下にあったので、一方的に父を憎む。だが、この父への憎悪は年を経るに従って、逆に母の子供を後楯にして家庭を支配するやり方に憎しみを抱く様になる。この作品でも父を憎悪してはいるが、いくらかの愛情が仄かに見られる。母との喧嘩で家出する振りをした父が、夜になってすごすご帰って来るところや、靴や水筒を修繕している時、楽しそうに歌をうたい、子供達に手伝わせながら、炭坑の話をやっているところなどに見られる。この上なく、父を憎んでいたのであれば、*The White Peacock* やこの作品の第一稿<sup>(注8)</sup>の様に父の登場を控えたであろう。父の暴逆的側面を描き出したのも、作者の精神年齢が高くなり、ものを客観的、批判的に、冷静な眼で見られる様になりつつある証拠であろう。母に対しても、彼は更に批判的眼を向ける様になる。即ち、彼は自分の身の巡りを精神的余裕をもって見

られる様になったのである。

*Sons and Lovers* の第一部で先ず言える事は、炭坑と炭坑夫の生活を完全に内側から描いたものとしては比類のない出来栄えであるという事である。それ故、当然炭坑生活も、物語の筋に背景を提供するばかりでなく、筋と密接不可分に結びついている。一方、第一部の中心といえば、Morel 夫妻の夫婦生活であるが、その破綻の一つの大きな原因が、その背景に由来している。生活力旺盛で、本能的だが野心など少しも持ち合わせていない Walter Morel には、炭坑町の生活は、炭坑と居酒屋以外何も意味がない。

だが、妻 Gertrude はと言えば、中流階級の生活に憧れ、教会に通う事と、子供を出世させて、自分の夢見る中流階級の仲間入りをさせる事を楽しみにする以外、生きる意味を認めない。だから新婚の楽しい夢が醒めると、夫婦間には性格の険悪な対立、葛藤だけが残る。だが、この夫婦間の均衡の破綻の主なる原因是、単に対立する二人の性格だけでなく、妻が夫を支配しようとし、その性格を夫に押しつけ様とするところにあった。妻は夫のあるがままの姿には飽き足らず、自我を夫に押しつけ、自分の願望に迄夫を引き上げ様とした。これが真の破綻の原因である――

The pity was, she was too much his opposite. She could not be content with the little he might be ; she would have him the much that he ought to be. So in seeking to make him nobler than he could be, she destroyed him. She injured and hurt and scarred herself, but she lost none of her worth. (Chap. I)

悲しいことに、彼女の性格はあまりにも彼と対照的だった。彼女は彼がなしうる僅かばかりのことで満足しないのだった。そのため、彼の能力以上に彼を高貴なものにしようとして彼を滅ぼしてしまった。彼女は自分をもそこない、傷つけ、傷あとを残したが、自分の価値は少しも失わなかった。  
(伊藤整訳)

破綻は妻がその性格を以て、夫を割り切ろうとする無理にあった。父への憎しみ、母への同情はあらゆる個所に現われるが、作者は最終的には母の方に、夫婦生活及び家庭の不和の原因を見い出している。ここでも、母への批判的気持が働いている。

以上の事からも窺われる様に、Lawrence 自らの一生の課題となっていたのは、孤立し対立した孤独な存在である人間が、互いに他を犯す事なしに、如何に結びつくかという事であった。この問題を彼は、*Sons and Lovers* の中では Morel 夫妻の夫婦関係で扱い、Baxter Dawes と Clara の夫婦関係にもそれを見い出す。Paul の次の言葉が、Dawes 夫妻の夫婦関係をよく説明している――

“You imagined him something he wasn’t. That’s just what a woman is. She thinks she knows what’s good for a man, and she’s going to see he gets it ; and no matter if he’s starving, he may sit and whistle for what he needs, while she’s got him, and is giving him what’s good for him.” (Chap. XIII)

「きみは、彼を何かじっさいの彼とは違ったものに想像した。女はよくそれをやるんだ。女は、男が何を欲しがっているか知っているような気になって、自分のやるものを受け取

るのを見ようとするんだ。そして、彼が飢えかけていても、そんなことはおかまいなく、彼を捕えて、自分が彼のためになると思うものを与えておく。けれども、男は自分がほんとうに必要とするものを求めて、口笛を吹いているかもしれないんだ」  
(伊藤整訳)

この様な夫婦生活に於ける対立は、同時に広く恋愛関係に於ける両性の対立で、Lawrence の今後追求すべき問題となる。

Paul との肉体関係の後に、Clara は Baxter の処へ戻って行く。Paul との関係では Clara は自分の中に彼を解消させることが出来なかつたが、Baxter は彼女の自我の中に融け込む事が出来た。Paul—Clara では双方のエゴイズムの衝突しかなかつたが、Baxter—Clara では彼女のエゴイズムは維持し得た。それ故、Baxter の元に戻つたのであった。

Morel 夫妻の様な夫婦生活の破綻が息子に如何なる影響を与えるかという事が、*Sons and Lovers* の中心課題になっている。この作品は次の様な思想で書かれている――

It follows this idea : a woman of character and refinement goes into the lower class, and has no satisfaction in her own life. She has had a passion for her husband, so the children are born of passion, and have heaps of vitality. But as her sons grow up she selects them as lovers—first the eldest, then the second. These sons are urged into life by their reciprocal love of their mother—urged on and on. But when they come to manhood, they can't love, because their mother is the strongest power in their lives, and holds them. It's rather like Goethe and his mother and Frau von Stein and Christiana—As soon as the young men come into contact with women, there's a split. William gives his sex to a fribble, and his mother holds his soul. But the split kills him, because he doesn't know where he is. The next son gets a woman who fights for his soul—figths his mother. The son loves the mother—all the sons hate and are jealous of the father. The battle goes on between the mother and the girl, with the son as object. The mother gradually proves stronger, because of the tie of blood. The son decides to leave his soul in his mother's hands, and, like his elder brother go for passion. He gets passion. Then the split begins to tell again. But, almost unconsciously, the mother realises what is the matter, and begins to die. The son casts off his mistress, attends to his mother dying. He is left in the end naked of everything, with the drift towards death.

It is a great tragedy, and I tell you I have written a great book, It's the tragedy of thousands of young men in England.....(注9)

それは次の様な考え方によっているのです。品性があり、洗練された女性が、下層階級に入りますが、自分の生活に満足しません。彼女は夫に情熱を持っていました。それ故子供達は情熱を持って生まれ、生命力の躍動を持っています。だが、息子達が生長するに従つて、彼女は彼らを恋人として選びます。一最初は長男を次に次男を。これらの息子は母親との相互恋愛によって次々に人生に駆りたてられます。だが、彼らが成人に達した時、愛する事が出来ませ

ん。というのは母親は彼らの生活に於いて最も強い力であり、彼らをつかんでいるのです。それはむしろゲーテやその母親やスタイン夫人やクリスティアナのようなものです。——若者達が女性と接触するようになるや否や、分裂が生じます。ウィリアムはくだらない女にその性を与えるが、母が彼の魂をつかんでいます。だが、その分裂が彼を殺します。というのは彼は自分がどこにいるか分らないからです。次男は彼の魂を求めて戦う——彼の母親と戦う一女性を得ます。息子というのは母を愛するものなのです——すべての息子というのは父親を憎み嫉妬するものなのです。戦いが息子を目的として母親と少女との間に進行します。母親は血のつながりの為に、徐々に更に強い事が明らかになっていきます。息子は母親の手のなかに自分の魂を残して、兄の様に情熱を求めて外に出てゆく決心をするのです。彼は情熱を得ます。そして分裂が再び表われ始めます。しかし、殆んど無意識に母親は事情を悟り、死に始めます。息子は愛人を捨て、瀕死の母親の看病をします。彼はついにあらゆるものを剥ぎとられて残され、死に向って流されていくのです。

それは偉大なる悲劇です。そして実際私は偉大な本を書いたのです。それはイギリスの数千の若者の悲劇です——  
(筆者訳)

William の女性関係は、相手の Lily が莫迦みたいな取るに足らない女で、彼の魂迄は求め様としなかった為、問題は簡単であった。Paul の場合は問題はずっと複雑になる。William の突然の死は母を生ける屍としてしまった。だが、そうした母の生命を蘇えらせたのは、皮肉にも Paul の病であった。幸か不幸かその約三ヶ月後に、彼は急性肺炎にかかる。母の夢中なる献身的な看病は息子 Paul を蘇させたと同時に、彼女自らをも蘇させたのである。

この病の後の回復期は、今後母 Gertrude と息子 Paul が完全に親しみ、結びあう事を確認した時期であった。夫婦生活の破綻から、その誕生を呪わしい気持で悲しみ、その償いとして自分の愛情のすべてを、この子にそぞうとの決意が、この *Sons and Lovers* の中心主題と言われる Oedipus Complex の原因の動機であったのだ。即ち、母の胸底深く疼く償いの感情、贖罪の意識であった。ぐうたらな飲んだくれの坑夫の夫に裏切られた腹いせに、復讐するかの様に子供を溺愛し、それに応えた子供も父を憎み母を盲愛する、というあり方は単なる Oedipus Complex の表面的図式にすぎない。これについて Alfred Booth Kutter は次の様な見解を示している(注10)——

The fundamental theme of the novel was, of course, the Oedipal conflict, which Paul was unable to resolve because of two factors : his inability to identify with a father he could not admire, and his mother's excessive love for him as a replacement for husband. Unable to move beyond childhood emotionally, Paul was ultimately drained of his will to live, and at the novel's end, was doomed to a continual restless wandering.

この小説の基本的なテーマは、勿論、エディップス・コンプレックス上の闘争である。それをポールは次の二つの要素の為に解決する事が出来なかった。即ち、彼の敬服する事の出来ない父親と同化出来なかったことと、そして夫の代りとしての彼の母の過剰な愛であった。情緒的に幼年時代を越える事が出来なかったので、ポールは結局、生きようとする意志を奪われ、

そしてこの小説の最後で、断え間なく不安にさまようように運命付けられているのだ。(筆者訳)  
こういう状態の時、第一部第六章 “Death in the Family” で Paul の恋人 Miriam が登場する(注11)。Miriam は William の女 Lily とは違って、Paul のすべてを飽く迄求め続ける。必然的に母 Gertrude—Paul—Miriam の奇妙な三角関係が生まれ、母と Miriam の間には激しい闘争が起こる。魂は母に預けてしまっている Paul は、Miriam の愛情は精神的過ぎると感じる。だが、Miriam は Paul の精神のみならず肉体その他すべてを欲していた。恋敵としての母親は女独特の鋭い嗅覚で、この事を嗅付けていた――

“She’s not like an ordinary woman, who can leave me my share in him. She wants to absorb him. She wants to draw him out and absorb him till there is nothing left of him, even for himself. He will never be a man on his own feet—she will suck him up.”

(Chap. VIII)

「あの子は普通の女のように、ポールの一部をわたしのところに残して行くような女ではない。あの子はポールを全部吸い取ってしまいたいのだ。あの子はポールの心を洗いざらい引き出して、ポール自身にさえも何も残らぬほど、全部を吸い尽くしたいのだ。ポールは自分というものを持った人間にはなれないだろう——あのミリアムがポールを吸い尽くしてしまう」

(伊藤整訳)

母は苦しむ。その苦しみを知った Paul は Miriam に対して残酷な気持にかられ、彼女を憎む。彼は Miriam に「男と女とが共に二人でいる」様な友情だけしか与えられないである。自分のすべてを独占しようとする彼女の態度には我慢が出来ない。Paul は彼女に言う――

“You see,” he said, “With me—I don’t think one person would ever monopolize me—be everything to me—I think never.”

(Chap. IX)

「ねえ、ぼくは一ひとりの人間に独占されることはないと思う——ぼくにとってその人がすべてであるということには一決してならないよ」

(伊藤整訳)

この言葉に答えて Miriam が言っている様に、その原因は母親にあった。魂は母に預け、肉体のみ彼女に求めた。だが、すべてを独占しようとする Miriam は、魂の伴わない肉体だけの愛には応じ様とはしない。そういう Paul にとっては、彼女は余りに精神的存在としか眼に映らなかつたのは当然である。こういう状態になった二人の関係は行き詰り、Paul は彼女が二十一歳の時、不幸な恋人に対して以外は書けない様な手紙を彼女に送る(注12)――

“See, you are a nun, I have given you what I would give a holy nun—as a mystic monk to a mystic nun. Surely you esteem it best. Yet you regret—no, have regretted—the other. In all our relations no body enters. I do not talk to you through the senses—rather through the spirit. That is why we cannot love in the common sense. Ours is not an everyday affection.”

(Chap. IX)

「あなたは尼です。ぼくがあなたに与えてきたのは、敬虔な尼に与えるような一神秘な僧侶が、神秘な尼に与えるような一ものでした。確かに、あなたそはれを最高のものと思ってい

ます。そのくせ、あなたは後悔しています一いや、ずっと後悔してきたのです—そうした精神的な愛だけだったことを。ぼくたちふたりの愛情には肉体的なものがいはってきたことはありません。ぼくは感覚的のものと言っているではありません—むしろ精神的な立ち場から言っています。ぼくたちが普通の意味で愛し合えないのはこのためです。ぼくたちの愛情は日常生活にある愛情ではありません。

(伊藤整訳)

ここで、彼は結婚出来ない事を語る。母の愛情の強力な忌わしい影響は、遂に二人の恋愛をこわしてしまった<sup>(注13)</sup>。

数年、間を置いて、二人は再び接近し、恋の残滓は油に火をつけた如くにめらめらと燃え上がる。Paulは今度は率直にMiriamに肉体を求めた。最早、Paulの魂を求め切れないと悟ったMiriamは、彼の求めるままに犠牲としての自らの肉体を捧げる。宗教的犠牲といった様に身を差し出すMiriamを見ては、如何に彼女の肉体を求めていたPaulにしても、没我的性交渉は得られるものではない。

Mirianを見ていると情熱がさめ、分別が戻って来てしまい、宇宙の大なる存在と融合して一つになる境地には到達出来ない。Paulの言う、意識しつつ眠っているという状態——永遠の世界は、犠牲としての性なる存在であるMiriamからは、とても得られなかった。母に魂を預けてしまったPaulと、彼の魂を求め切れず、肉体だけを犠牲として捧げたMiriamこれでは恋愛関係が分裂しないほうがおかしい。

これと対照的なのは、PaulとClara Dawesとの肉体関係である。成熟した肉体と、いやらしくない程に激しく練れた性愛の技巧に、Miriamでは最後迄満されなかつた性の満足を、Paulはこの女から得る。だが、この肉体関係は後迄尾を引かない。そこには、Miriamとの間に支えようとしても支え切れなかつた生の重みなどは何もないからだ。魂の籠らない肉体関係も矢張り崩解の憂き目に会う。結局ClaraはBaxterの許に戻って行き、二人は別れるのである。

本来は*Sons and Lovers*の序文となるべきもので、後に放棄された文章<sup>(注14)</sup>がある。晦渋な文章だが、Lawrenceのこれから発展し、後にはっきりとした姿を現わす思想がいくつか含まれている。父なる神は肉で男性は女性の肉を通じて父なる神と接し、明日は新しい生命と力を得て、星の働きに出掛けるという事などが書かれている。こういう思想の下には、彼の強いエゴイズムが根をはっており、後の作品にこの思想が、文学的表現を与えられてはっきりと出て来る。

最後には、PaulはMiriamと別れ、Claraに棄てられ、母に死なれる。絶望的になって、死の淵をさまようPaulだが、決して自らの命を放棄する事なしに、明るい希望に向って歩み出すであろう事は、最後の一節に象徴的に暗示されている——

But no, he would not give in. Turning sharply, he walked towards the city's gold phosphorescence. His fists were shut, his mouth set fast. He would not take that direction, to the darkness, to follow her. He walked towards the faintly humming, glowing town, quickly.<sup>(注15)</sup>

しかし、いいのだ。彼は降参したくなかった。彼は身をひるがえすと、町の黄色いきつね

火の方へ向って歩きはじめた。彼は手を握りしめ、口を固く結んでいた。彼は母親のいる暗やみの方角をとろうとはしなかった。彼はかすかな騒音を伝えてくる、明るい町の方へ足ばやに歩いて行った。

(伊藤整訳)

## II *The Rainbow* と *Women in Love* に於ける両性関係

母が死に、Frieda との恋愛が実を結ぶ事によって、Lawrence は次の新しい時期に入る。Frieda との恋愛は彼にとってただ甘美なものというだけでなく、苦しい闘争でもあった。母に代って、Frieda が新しく彼の支えになったが、彼の自我は母の支配に甘んじた様には、Frieda の支配を肯んじ様とはしなかった。彼の暗い自我が頭を持ち上げて来て、同じ様な強烈な自我を持った Bavaria の黒い森 (Schwarz Wald) に遙しく育った雌豹の様な女 Frieda に闘いを挑むのである。彼の文学上の或る意味での恩人 Garnett への手紙<sup>(注16)</sup>でもこう言っている――

You needn't think we spend all our time billing and cooing, and nibbling grapes and white sugar. Oh no—the great war is waged in this little flat on the Isarthal, just as much as anything else.

私達が何時もいちゃついたり、葡萄の実や白砂糖をかじったりして時を過しているなどと思わないで下さい。あー、全く違うのです。大変な戦いが他の場所と同じように、スサールタルのこの小さなフラットでも行われているのです。

(筆者訳)

肉体的にはひ弱であった Lawrence は、Frieda との生活を通して、女性は常に恐しいものだ、という事を痛感し、彼女に対して自分は何時も負け犬だという屈辱を感じていた。この屈辱感から彼は性を理想化する傾向があらわれるのである。又、この屈辱の反動として、女性に対して、男性への奉仕を要求する様になるのも、Lawrence の強い自我から見れば当然な事であろう。だが、女性にばかり奉仕を要求する訳ではない。男性にも神秘なるものへの奉仕を要求して、自らのエゴイズムを正当化しようとする。食欲、知識欲の満たされた後に残る最後の欲望は女性に対する欲望であった。この欲望は彼の場合一人の女によって満たされ、完全な充足と平和がもたらされる。それは自我を超越したものである。男性たる Lawrence は自我を超越しているが、女性は未だ超越していない。もし女性が自我を超越すれば、お互いに独立して、且つ結びつく境地に到り、その両性間には本当の自由が存在する様になる。この様な Lawrence の考え方は、Frieda との果てる事のない闘争から生まれた。自分の自我を彼女に支配、拘束されるのから逃れて、自我の独立を得る為に自我を超越する事を説いたのであった。だが実生活に於いては、自我心の強烈な Lawrence は同じように強烈なエゴイストである妻との間に、互いに他を己れに屈服せしめ様とする闘争を行っていた。そして彼は本心では互いに自己を保ちつつ結びつくという性の境地を理想とはせずに、自らの自我に勝利を与え相手の自我を消滅させるという事を願っていたのだ。こういう実際の夫婦生活を下敷きにして、彼は *The Rainbow* と *Women in Love* を書いて行ったのである。

*Sons and Lovers* を完成した Lawrence は、次に *The Sisters* という小説に着手し始めた。これは、余りに素材が多数すぎるので、二編の小説に分け、最初の小説を初め *The Wedding Ring*

後に *The Rainbow* と名付け、第二の小説は *Women in Love* と名を与えた。この二つの小説は同じ源から発した二つの流れだが、それ程双方は密接につながっていない様だ。だが双方共に、Lawrence の成熟した哲学と円熟した手法の始まりを表わしている点で、断層はないのである。*Sons and Lovers* など彼の最初の三作品が持っている様な形式のものなら、彼の同時代の作家の何人かは書き得たであろうが、この二作品は Lawrence 以外どの作家にも到底書けそうもない、まぎれもなく Lawrence 的小説である。ここに初期の小説の伝統的形式に対する破壊作業が始まったのである。

Frieda と共に英国を去り、異国之地を巡り歩いていた Lawrence は、一抹の郷愁を感じたのであろう。*The Rainbow* の背景には英國を選んでいる。彼が Frieda と駆落ちした事は、如何に世間一般の道徳が無分別な間違った行為だと非難したとしても、彼には何ものにも代えられぬ新生と幸福を与えた。この様な事情から、道徳とは無関係の反知性的哲学に彼は向ったのであろう――

My great religion is a belief in the blood, the flesh, as being wiser than the intellect.  
We can go wrong in our minds. But what our flood feels and believes and says, is always true. The intellect is only a bit and a bridle. What do I care about knowledge. All I want is to answer to my blood, direct, without fribbling intervention of mind, or moral, or what-not.<sup>(注17)</sup>

私の偉大な宗教は知力より賢明なものとして、血を、肉を信じることなのです。私達は頭脳では失敗する事はあります。しかし、私達の血が感じ信じ、言う事は常に真実です。知力は単なるくつわや手綱なのです。私が知識にどんな関心があろうか。私が欲するのは、精神や道徳やなにやかやのつまらない干渉なしに直接に私の血に答えることだけなのです。(筆者訳)

この思想は、例の *Sons and Lovers* の序文と言われる一文の思想と共通する点が相当ある。この序文には、聖書を思わせる表現が多々ある。“One has to be so terribly religious, to be an artist”<sup>(注18)</sup>。（人は芸術家になるには、全く宗教的にならなければなりません）と後になって手紙に書いた事によっても分る様に、Lawrence は生の哲学を宗教的な情熱で探求した。だがその一生を通じて探求した彼の宗教は、キリスト教と対決し、その反対側に立つ一種の異説であった。この序文は肉の宗教を説いたものであり、*Sons and Lovers* の序文には相応しいものでなく、後になって展開される彼の哲学を含んでいるのである。この哲学に文学的表現の肉付けをした最初の作品が *The Rainbow* である。

*The Rainbow* は前の題名 *The Wedding Ring* が暗示する様に、結婚を取り扱った小説で、三組の両性関係が表わされている。それは Brangwen 一族三代に亘る物語であるが、時間的、歴史的推移は然程重要でない。それどころか、同時にこの三代の夫婦関係が存在しても一向にかまわない様に感じられさえする。一方、三代を代表する三人の Brangwen が同一の永遠の情況に直面するという構想は、他には余り見られない独特のものである。また、この作品は人の性格をというより、人物の立っている、それぞれの段階を描いた小説だと言えよう。即ち、登場人物を中心としたものでなく、何か偉大な眼に見えない非人間的な力を中心にして、構想されたと考えられる。この

様に Lawrence の関心は、*Sons and Lovers* の「知られるもの、捉える事の出来るもの」から「知られないもの、曖昧なもの」に移行してゆく。*The Rainbow* に於いて、主要人物のすべてが探し求める理想とは、光と闇、見えるものと見えないものとの調和である虹に象徴され、この象徴は Brangwen 家、初代 Tom Brangwen が洪水で溺死するのに呼応し、洪水と虹とが、ノアの洪水に通じる(注19)。この洪水は、Ton Brangwen の溺れ込む感覚的、肉体的生活を象徴しているのであろう。

*The Rainbow* の最初にも叙述されている Brangwen 家の男女の対比を先ず頭に入れて、この作品を考えた方が理解し易いであろう。即ち、男は本能的エネルギーを以て、感覚的、肉体的生活に満足しているが、女は知的願望を持っていて、それとは違う生活を夢見ているのである。こういう事情を背景にして、最初に Tom Brangwen と Lydia Lensky の夫婦が登場する。

この夫婦関係は、自我の対立・闘争といった現代の病患が両性関係を蝕む前の一種の均衡状態を見せている様だ。Tom は Nottingham の農夫であり、Lydia は亡命ポーランド人医師の未亡人で、知識階級の気風を身につけており、Anna という娘を連れている。この異なった階級に属するところに両者の性格上の相違がある。更に Lydia は暗い自我を所有していた。二人は恋に落ちて結婚という事になるのだが、Tom が彼女に求愛しそれが受け入れられて接吻した時、彼の心には次の様な戸惑いが生じる――

She lay still against him, taking his physical warmth without heed. It was great confirmation for him to feel her there, absorbing the warmth from him, giving him back her weight and her strange confidence. But where was she, that she seemed so absent? His mind was open with wonder. He did not know her. (Chap. I)

彼の身体の体温を容赦なく受けながら、女はまだ彼に倚りかかっている。彼からの体温を吸いとて、同時に彼女の体重と、そして奇妙な安心とを彼に投げかけながら、こうしてしっかり女の肉体を感じていること、それは彼にとって、この上もない強い確証だった。だが、それにもかかわらず、女がこんなにも空しく感じられるとは、いったい女は何処にいるんだ?

男の心は、今さらのように驚きに開ける。彼にはわからない彼女だった。(中野好夫訳)

Tom の Lydia に対する、こういう異和感・冷いよそよそしさは、今後の夫婦生活に於いても消える事がない。Lydia は夫にとって、測り知れない不思議な存在であり、相手に心を開かない女であった。夫にとって妻は未知の神秘的存在となり、その欲情も崇拜の念に近くなる。これ故、完全な両性関係は仲々達成され得ない。更に妻は妊娠中に夫に無関心になって、夫婦の心の溝は一層深まり、夫はその満たされぬ心を継子 Anna に向け、一心に愛情をふりそそぐのである。こういう夫婦関係・親子関係は *Sons and Lovers* にも出て来たが、*The Rainbow* では深く追求されず、暫くするとこの夫婦の間には或る種の均衡状態が生じる。彼にとって、妻は入口であり出口であった。彼は妻の中で彼岸の世界を旅して行くのであった。又、Anna は父母の出会った虹の下で自由に遊ぶのであった――

Only when she (Lydia) touched him (Tom), he knew her instantly, that she was

with him, that she was the gateway and the way out, that she was beyond, and that he was travelling in her through the beyond. Whither?—What does it matter? He responded always. When she called, he answered, when he asked, her response came at once, or at length.

Anna's soul was put at peace between them. She looked from one to the other, and she saw them established to her safety, and she was free. She played between the pillar of fire and the pillar of cloud in confidence, having the assurance on her right hand and the assurance on her left. She was no longer called upon to uphold with her childish might the broken end of the arch. Her father and her mother now met to the span of the heavens, and she, the child, was free to play in the space beneath, between.

(Chap. III)

彼女が、彼に相触れた時だけに、彼は、たちまち、稻妻のように、彼女が彼とともになること、身近なること、そして彼女こそは、入口であり、出口であり、また彼岸の世界の存在であり、その彼女の中においてこそ、彼は、彼岸の世界を進んでいることを、直観した。だが、いったい、どこへだ?—だが、そんなことは、どうでもよい。彼は、いつも、直ちに応答した。彼女が呼べば、彼が答え、彼が求めれば、彼女の応答は、直ちに、でなければ、早晚必ず来た。

彼等二人の間に立って、アナの魂も平静になった。二人の存在が、確立されて、そこに彼女を安定ならしめていることを知った。彼女は自由だった。右手にも確信、左手にも確信を擁しながら、火の柱と雲の柱との間に、彼女は戯れた。もはや子供の力で、壊れた拱門の両端を支えていなければならない必要は、なくなった。彼女の父と母とは、今や、彼女の頭上はるか天に、その弧線を、ガッシリ結合されていた。そして彼女、アナは、その下、その間の空間に、自由に遊び戯れていた。

(中野訳)

この夫婦生活は、後に Lawrence が追求する色々な分裂した両性関係以前に於ける、何世代か前の、感覚的、肉体的次元に限定された、古き良き時代の理想境に到達している。この限定は Tom が洪水で死ぬ事にも暗示されている。

次の世代の Anna と William Brangwen の組み合わせは、女性が自らの優位を男性に主張するという、現代ではよく見られる、性的関係である。女性は、日常生活に於いて、男性を屈服させ支配しようとしている。Lawrence は考えるのである。

現代の両性関係に於いて、いつもの方が先手であって、男は後手にばかりまわっている。女は母として、生命、存在、文化の大根源で、男はその道具に過ぎない、という意識が女性のうちには強く根をはっている。Anna もそういう女性として家に君臨する様になるのである。

Anna の宗教は自我の宗教である。即ち彼女は、自分の自我を飽く迄も保持し、それを男性に押しつけていこうとし、又自分は「宇宙の中心」であると考えている、自我心のかたまりの様な女である。一方 William は宗教的神秘を感じる男であり、自我を意識する事など無意味としか感じなかった。それ故、二人の間にはこんな争いもあった——

( 87 )

She wanted her own, old, sharp self, detached, detached, active but not absorbed, active for her own part, taking and giving, but never absorbed. Whereas he wanted this strange absorption with her, which still she resisted. (Chap. VII)

彼女は、彼女自身の古い、鋭い自我、ただ一人独立して、積極的ではあっても、決して他に吸収されてしまわない自我、与えたり、取ったり、彼女自身のためには積極的だが、決して吸収されることのない自我を要求した。ところが、他方彼の方は、彼女に対して、この奇妙な忘我的吸収を求めていたのであり、それだけに彼女は、あくまで抵抗した。 (中野訳)

最初こそ、William は自分の自我を保持しようと Anna に対抗するが、次第に彼女の前に屈服してゆき、最後には彼女に支配され、依存する様になり、完全に彼女の所有物と成下ってしまう。その間、彼女は彼が自己中心的だと感じると涙を流したり、肉体的魅力で誘ったりして、何とか彼を自分の力の中に封じ込めようとするのである。妊娠した時の Anna はみごもった事を誇りに思い、歓喜にあふれて、全裸となり、「見えない創造主なる神」the unseen Creator (or the Unseen) に対して、鏡に自分の姿を写し踊りまわる。自分は母なる大地であるという自信からであろう。この場面は、エゴイズムに徹したナルシシズムを典型的に象徴した情景と言えよう。

作者 Lawrence は、肉に於いて結合し、言葉に於いて対立する男女の性の理想は、「征服」ではなく「均衡ある調和」にあると考えている。この理想的境地を William は一度味わうのである。夫妻がリンカーン大聖堂を訪れ、聖堂内に入ると、William の魂は大地から突き上げて来る二つの力が組み合って、調和あるアーチを描く寺院建築の美に接した——

And there was no time nor life nor death, but only this, this timeless consummation, where the thrust from earth met the thrust from earth and the arch was locked on the keystone of ecstasy. This was all, this was everything. Till he came to himself in the world below. Then again he gathered himself together, in transit, every jet of him strained and leaped clear into the darkness above, to the fecundity and the unique mystery to the touch, the clasp, the consummation, the climax of eternity, the apex of the arch.

(Chap. VII)

今は、もう時も、生も、死もなかった。あるものは一つ、ただ永劫の生の完成、それだけだった。そこでは、大地から突き上げる一つの力が、今一つのこれも大地から突き上げる力と一つになって、アーチは、歓喜法悦の要石の上に、しっかりと結ばれ合っている。それだけが一切、すべてだった。やがてその彼も、一度は下界なる我に返った。だが、まもなくふたたび激しい緊張状態に入ったと見ると、彼の中のあらゆる細胞は、一つ一つが光の矢になって、はるか頭上の幽暗の中、生の豊饒とその無比なる神秘、生の接触、抱擁、完成、そして永劫の極致、アーチの頂点へと、鮮かに躍り上って行った。 (中野訳)

一瞬性の理想境にあった Milliam は、エゴイストである Anna に、「会堂との情熱的交流」という恍惚境を破壊され、「陶酔していた情熱」を再び味わう事は出来ない。Anna は絶対者に全幅な信頼を置く彼に我慢出来なかつたのである。彼女は寺院の外にはもっと高い所に、自由の中でも

っと高い自由をもって動いている星々の空があると、大聖堂の壁に刻まれた意地の悪そうな小鬼達を見ながら、意識する――

They knew quite well, these little imps that retorted on man's own illusion, that the cathedral was not absolute. They winked and leered, giving suggestion of the many things that had been left out of the great concept of the church. "However much there is inside here, there's a good deal they haven't got in," the little faces mocked. (Chap. VII)

そうだ、たしかによく知っている。人間の幻覚に対して、あたかも逆捩じを食わしているかの如きこれら小鬼どもは、伽藍が決して絶対的なものでもなんでもないことを、よく知っている。彼等は、まるで嘲笑うように、目くばせしたり、横目を使ったりして、教会というものが啓示する偉大な観念の外に、まだまだいろんなものが沢山あることを、それとなく暗示していた。「この中に、たとえどれだけのものがあるかしらぬが、世界には、まだこの中にはないものが、いくらでもあるのだ」それらの顔はそう嘲笑っていた。 (中野訳)

この後の議論で、William は妻を理解し、「外部の生命には、偉大で自由な、また喜びに満ちた、屈託のない何かがある、それは教会の内部には既に存在していないものだ、と感じる」(注20)。こうして彼は徐々に自分の信念を変えてゆく。

こうするうちに、子供を産むにつれて、「大地の様な、あらゆるもの母の様な感じ」を抱く様になった Anna は William を自分に隸属させる事になる。彼は精神の優位を捨て、男性の公的生活に対する尊敬をも女性に認めさせられず、ただ Anna との官能的愛によってのみ生きるに過ぎない空虚な存在に堕してしまったのである。

最後に登場してくるのは、Anna と William の子である Ursula と Anton Skrebensky の一組である。Ursula の青年期の体験は、大部分 Lawrence のそれであり、Lawrence はここで、Ursula の恋愛を通して、両性関係の理想の追求を試みる。彼女は生命力のある、主知的で自意識な女である。内部の真実の世界を生きる為に、日常性の中にありながら日常的なものを一切否定する生き方をし、現実の人間世界を否定する。又一方では日常的自我という古い殻を脱ぎ脱て、裸になる。そういう方向を勇敢にもとうとする現代女性なのである。また早熟で、女学校時代に Anton に恋をする。彼はポーランド出の陸軍技師であり、Brangwen 一族の世界よりも洗練され、社会的にはより複雑な世界を象徴するのである。

若い Ursula は、初めのうちは、Anton の無とん着な様子と、美しい容姿に心を捉えられる。彼女には彼がいつも在るがままの自己をさらけ出し、自分の責任に於いて自分を保持する孤高の人物と見えたのである。即ち彼女は彼を自分と同じ強い自我の所有者と考えたのである。では、強い自我を持つ男女の恋愛はどうなるであろうか。男性としての自我を女性に対して断固保とうとする Lawrence は、William の様に女性に屈服するのが我慢出来ないのは当然である。

そこで、Anton—Ursula の場合には、男女互いに相手の自我を犯す事なく、強い自我の対立と闘争の上に眞の恋愛関係は成立するとした。即ちこの場合に於ける恋愛の理想は、男女双方の自我が同時に無限に拡大してゆき、星と星との間の様な均衡を保つ事であった。

だが、この理想状態に於ける二人は、またしても悲しみを味わななければならなかった——

…they were more vivid, and powerful in their being. But under it all was a poignant sense of transience. It was a magnificent self-assertion on the part of both of them, he asserted himself before her, he felt himself infinitely male and infinitely irresistible, she asserted herself before him, she knew herself infinitely desirable, and hence infinitely strong. And after all, what could either of them get from such a passion but a sense of his or of her own maximum self, in contradistinction to all the rest of life? Wherein was something finite and sad, for the human soul at its maximum wants a sense of the infinite.

(Chap. XI)

いわば二人とも、その生を、はるかに生々と、はるかに力強く感じていた。だが、それでいてその一皮下に潜んでいるものは、痛いばかりの生の無常観だった。いわばそれは、彼等双方からの驚くべき自己主張だった。彼女を前にして、彼は、自己を主張する。無限に自己を男性として、無限に不可抗の存在として感じるのだった。が、彼女もまた、彼の前に出ると自己主張に出る。それが無限に欲情の対象であることを知る故に、また無限に強くもあることを感じている。そして結局、二人ともそうした情熱から獲るものは、彼等を他の一切の人間から区別する、彼の、また彼女の、いわば極大限自我の意識だった。しかもそこにこそ、なにか悲しい、限られたものがあるのだ。なぜならば極大限における人間の魂は、そのことによってむしろ無限感を失うことになるからであった。

(中野訳)

ここに、自我の拡大を飽く迄追求する者が、必ず突き当たらねばならぬ限界の壁があった。この壁に当たると最早何の術もなく、自己拡大の喜びと自我の均衡は崩れ去り、遂に一方による他方の征服という状態迄に落ち込んでいく。Anton も結局は Ursula に征服されるのである。月光の下で二人が踊っている時、Anton は出来る限り Ursula の彼を征服しようという意欲と戦った——

But hard and fierce she had fastened upon him, cold as the moon and burning as a fierce salt. Till gradually his warm, soft iron yielded, yielded, and she was there fierce, corrosive, seething with his destruction, seething like some cruel, corrosive salt around the last substance of his being, destroying him, destroying him in the kiss. And her soul crystallised with triumph, and his soul was dissolved with agony and annihilation. So she held him there, the victim, consumed, annihilated. She had triumphed : he was not any more.

(Chap. XI)

だが、彼を捉えた彼女の呪縛は、あまりにもはげしかった。月のように冷たく、しかも劇しい塩のように燃えていた。ついには流石に彼の温い、柔かい鉄も、次第に溶けはじめた。そしてそこには、接吻に殺される彼を前に、まるで彼の最後の残骸をめぐる、おそらく残忍な腐蝕塩の沸騰のように、彼女が立っていた。彼女の魂は、勝利に美しく結晶してゆく前に、彼の魂は、苦痛と抹殺に溶けくずれていた。こうして彼女の腕の中には、消耗し、抹殺しつくされた犠牲の彼の肉体が、横たわっていた。彼女は勝った。もはや彼の存在はなかった。

(中野訳)

Antonにとって、Ursulaは暗闇そのものであり、いどんでくるもので、恐怖的的となつた。こうして Ursula に征服されてしまった時に、Anton の役割は終つた。南阿戦争の為に一時 Anton が彼女の許を去っていた後、再会した時二人の恋は燃え上つた。この際の二人の関係は暗い生命の根源に接近し、不死の暗い領域、楽園の闇に入つて、不思議な自由を感じたとされている。だが、この様な性関係は長続きはしなかつた。Anton は Ursula には、相手とするに足る自我の所有者ではなくなつていたのだ。そこに Anton が結婚の問題を持ち出して來た時、Ursula は結婚といった社会的慣習は、豊かなるべき生命を拘束する機械的なものと思った。Ursula もルーアンの会堂を見て、その絶対の美と安定、眞実の実在に感動した。この境地は、最早 Anton とでは求め切れるものではないと Ursula は悟り、彼と別れる。この Anton も結果的には、Ursula から独立した自己を失い、単なる属性となつてしまつた。

一方、Ursula はこれ迄のすべての事は非現実なものとして、これを脱ぎ棄て、現実的なもの、永遠的なものを求めて進もうとする。そういう時に、彼女は岡の上に虹を見る――

And the rainbow stood on the earth. She knew that the sordid people who crept hard-scaled and separate on the face of the world's corruption were living still, that the rainbow was arched in their blood and would quiver to life in their spirit, that they would cast off their horny covering of disintegration, that new, clean, naked bodies would issue to a new germination, to a new growth, rising to the light and the wind and the clean rain of heaven. She saw in the rainbow the earth's new architecture, the old, brittle corruption of houses and factories swept away, the world built up in a living fabric of Truth, fitting to the over-arching heaven.

(Chap. XVI)

今や大地には、虹がかかっていた。そして彼女は知つた、堅い鱗をまとい、めいめいに孤独に、この朽ち腐れた地上を這いまわる人間どもが、今もまだ生きていること、だが、今や彼等の血液の中に、虹はその橋をかけ、彼等の精神の中に、生々とおののきふるえ、人は、彼等を孤立に切り離す角質の殻を脱ぎ捨て、そこに新しい、清潔な、そして赤裸な肉体が、新しい発芽、新しい生長へと息づきをはじめ、光と風と、そして爽かな雨の中へと、力強く頭をもたげて行くのだ。彼女は、虹の中に大地の新しい建築を見た。古い、脆い、朽ちはてた家々、工場は押し流され、仰ぐ天空にふさわしいような、生ける「真理」の構造の上に築かれてゆく世界の姿を、そこに見たのだった。

(中野訳)

*Women in Love* は1916年に完成されたが、*The Rainbow* の発禁事件の為にすぐには出版出来ずに、1920年にやっとニュー・ヨークで予約のみの限定私家版として出版され、英國では1921年漸く Martin Secker 社から出版された。この間 Lawrence には不愉快な事件が幾つか起つた。最初のものは、この *The Rainbow* の発禁事件、次は1914年勃発した第一次世界大戦に於ける、妻の Frieda に関する、官憲の理不尽な度重なる迫害、経済的貧窮、Bertrand Russell や J.M.Murry など多くの友人との不和などで、こういった事が Lawrence の気持を暗く、苦々しく、孤独にし

た。イギリスに於いての文学上の、また道徳的、社会的迫害の為、戦争が終るとともに、彼は英國を脱出し、イタリー、セイロン、オーストラリア、メキシコなど各国を旅行して巡った。この「野蛮な巡礼」の間に、彼の思想は深まり、技法も円熟を加えたのである。

前述の通り、*Women in Love* は *The Rainbow* と同一の源を持つ、二つの流れであり、Lawrence 自身も前者を後者の続篇と考えているが、この二つの作品の間には、中心人物が Ursula で妹 Gudrun が登場すること、その背景が *The Rainbow* から予想出来るという、或る程度迄の継承である以外、然程密接な関係を持っているとは言えない。

*Women in Love* の冒頭は、教職に就いている Ursula と画家である妹 Gudrun とが、結婚について話し合っている場面である。*The Rainbow* に於けると同様、結婚が中心主題となる。だが、ここでは結婚というのは社会的慣習としての結婚ではない。今迄の古い慣習を打ち破る様な、個性的な二人の若い女性が、結婚の可能性を探求する試みである。*Women in Love* は事実、*The Rainbow* が当然のこととしている結婚制度を、あらゆる面から疑っているのである。

この主題の中心は、対照的な二組の恋愛である。即ち Ursula—Birkin と Gudrun—Gerald の二組で、この物語はこれらの恋愛の発生、展開、結末を詳細に述べたものである。これを簡単に Graham Hough はこう言っている——

Gudrun sees Gerald Crich, the young colliery owner, in the first scene of the book, and knows at once that she is to be deeply involved with him. Ursula meets Birkin, the inspector of schools, in her class-room not long after; and the rest of the book works out the relationships of the two couples.<sup>(注21)</sup>

グドルーンは本の最初の場面で、若い炭坑主であるジェラルド・クリッチに会い、彼に大変夢中になるであろうと、すぐに知る。アーシュラはその後、程なく自分の教室で視学官のバーキンに会う。そしてこの本の残り部分は、この二組の関係を浮彫りにしていく。（筆者訳）

これらの二組の恋愛は、殆んど時を同じくして始まり、写真の陰画と陽画の様に全く対照的な性質を表わしていく、互いに対比されながら読者に呈示されてゆく。当然、双方の恋愛の間には切っても切れない密接且つ複雑なつながり（Ursula—Gudrun は姉妹、Birkin—Gerald は親友、等々）があり、すべての事件、対話、場面等はこの二組の恋愛の少なくともどちらかには、関連しているのである。また二組の人々の違いは、溶解と再生、または新生とも言えるものを受け入れるか拒絶するかということである。その関係をたどってみよう。

初めに、Ursula—Birkin の関係はどうであろう。Ursula は炭坑経営者 Thomas Crich の娘の結婚式を見に行って、そこで Birkin を見かけた時、彼にひかれるが、彼のなかには「何か彼女を押しとどめるもの」、「冷たく、人を寄せつけない、窮屈的な自制力、或る種の敵意」があると感じる。それでも彼を知りたいと思う。やがて Birkin が視学官として、彼女が教師をしている学校にやって来た時、二人は身近かに言葉を交わすが、その場には彼の恋人 Hermione も居合わせており、自由な話が出来なかった。その機会は十一章になってやって来る。Birkin の平底舟に揺られながら、Ursula は彼と親しく語り合い、そこで彼は恋人 Hermione と別れてしまった事を彼女に告げ

る。

その時以来、二人の間には恋心が通い合う様になる。またこの場面で、Birkin のものの見方や思想が可成り表わされている。彼は人間社会が虚偽、虚飾に充满していることを知っている。彼は言う――

“Humanity itself is dry-rotten, really. There are myriads of human beings hanging on the bush—and they look very nice and rosy, your healthy young men and women. But they are apples of Sodom, as a matter of fact, Dead Sea Fruit, gall-apples. It isn’t true that they have any significance—their insides are full of bitter, corrupt ash.” (Chap. XI)

「人間性自体枯れ死んでしまったんです。ほんとうです。何万という人間が藪のなかにひっかかっています——しかも彼らはとても上等そうにばら色見えます、あなたのように健康な若い男女が。ですが彼らは、実際はソドムの林檎なんです。死海の果物、怨恨の林檎です。彼らになにか意味があるというのは誤りです——彼らの内部は苦い、腐った灰でいっぱいなんです」

(伊藤整訳)

その上、「人類は枯木」に過ぎず、自分も含めた「世界中の人が死ねばいい」と思う。その結果「人が消え失せて、草が欲しいままに生い茂り、野兎が坐っている世界」に憧れる Birkin は愛を全く信じない。彼にとって愛とは他の種々な感情と並ぶ一つの感情に過ぎず、絶対的なものではない。愛は人間関係の一部分でそれ以上のものではない。故にそれは悲しみとか昔の喜びを常に感じていられないのと同じ様に、常に感じていられないし、それ程必要不可欠なものでもない。

愛についての二人の問題は、第十三章の Birkin のアパートの場面に於いても繰り返えされる。人間と人間とが結ばれるのは愛によってではなく、「何か最終的なもの、絶対確実なもの」によつてであり、愛という名をもつた誤魔化しを以てしては、人の眞の結合は成就出来ない。こうして孤独な人間の自我を直視し、人の偽瞞をはぎとつて、その奥にある次元で人間の結びつくものを見る Birkin は、そこにあるのは愛ではなく、次の様なものであると言っている――

“There is,” he said, in a voice of pure abstraction, “a final me which is stark and impersonal and beyond responsibility. So there is a final you. And it is there I want to meet you—not in the emotional, loving plane—but there beyond, where there is no speech and no terms of agreement.”

(Chap. XIII)

「あるのは」と彼は純粹にわれを忘れた声で言った。「硬い、没我的な責任を越えた、最終的なわたしです。同じように最終的なあなたもあるのです。そこそわたしがあなたに会おうと望んでいるところなのです——情緒的な、愛の平面でなく——言葉もなければ同意の条件もない、遠いところです」

(伊藤整訳)

この様な次元で結びつくという事は、エゴイズムとエゴイズムとの単なる対立ではない。勿論、安価な自己放棄でもない。窮屈の自我を押し進めた先に、それを超えるものを発見したのである。それは Lawrence に言わせれば、宇宙に充满する生命の流れと一体となることである。人間を越えた「創造的な言葉」に接することである。こういう次元で男女が結合する時には、そこには強制

的なものではなく、自然な平穏な暖い光に包まれる。これが、Lawrence の理想的な両性関係である。

だが、この様な状態は実際には Frieda に理解されなかつたのであらう。そういう Lawrence の悩みは、Birkin—Ursula の関係にもよく表わされている。尤も、Birkin 自身この様な性の理想は女性には理解されにくいと考えている。彼は女性の中に、愛という大義名分を振り回しながら、貪欲な程、男性を所有すること、制御すること、その支配者たることを欲している姿を見るのである。そして――

It filled him with almost insane fury, this calm assumption of the Magna Mater, that all was hers, because she had borne it. Man was hers because she had borne him. A Mater Dolorosa, she had borne him, a Magna Mater, she now claimed him again, soul and body, sex, meaning, and all. He had a horror of the Magna Mater, she was detestable.

(Chap. XVI)

偉大なる母というこの静かな想定、すべてのものは彼女が生んだものであるゆえに彼女のものであるという想定は、彼を狂気のような怒りでいっぱいにした。男は彼女が生んだものであるゆえに彼女のものである。悲しみの母、彼女は彼を生んだ。偉大なる母、彼女はいまふたたび彼に、その魂も肉体も、性も、意味も、なにもかも自分のものであると主張する。彼は偉大なる母の恐ろしさを味わった。彼女はぞっとするような存在だった。 (伊藤整訳)

女性のエゴが男性を屈服させ様と狙っているので、Birkin はぞっとするのである。というのは、彼は性も他の諸々の欲望と同じ水準に戻り、何かの成就ではなくて、機能の一つの過程と見なされるのを望んだからである。彼は性的な結婚は肯定したが、さらにこれをはるかに越えた結合を求めた。そこでは男も女も自分の存在を持ち、二つの純粹な存在となって、互いに相手の自由を損わずに、一つの力の二つの極のように釣り合いを保っている、そういう状態を望んだのである。Ursula とは自分ひとりでいる時と同じ様に、ただひとりで冷たくさっぱりと、しかし両極をなして釣り合いを保っていたかった。愛に於ける合体、把握、混り合いなど、受け入れる事は出来なかった。

それが故に、Birkin が Ursula の女性としてのエゴイズムを粉碎しようとするのは当然であろう。その努力は第十九章の “Moony” と題する挿話に、暗示、象徴されている。Ursula は或る日の夕暮に、ウィリー湖の堤防の上に立っている時、偶然その近くに Birkin がいるのに気が付く。そうとは知らない彼は、湖面に枯れた花を投げ、「シベール厭な女だ！呪われたシリア・ディー！」と叫ぶ。そして湖に映った月影に石を投げた。青白く光る月は跳ね、揺れ、歪み、鳥賊か、発光性のポリップのように火の手足を伸ばし、力強く脈動する。彼は幾度か石を投げる。月は水の上で破裂し、白い危険な火の破片となりばらばらになり飛び散った。しかしすぐに元通りの姿に戻って、再び自己主張を始め、力を得て勝ち誇って水面に震えた。

彼は石を投げて、水面の月影を粉碎する行為を何度も何度も繰り返すのである。男を征服、支配しようとする女のエゴイズムを破壊しようとする象徴的行為である。それを見ていると Ursula は茫然として、何も考えられなくなってしまった。自分が地に倒れ、地上の水の様に自分が流れ出し

てしまった様な気がした。強い自我の所有者である彼女は、何度も破壊される水面の月の姿が自分自身の自我の様に感じられて、我慢出来なくなつたのであろう。たまりかねて、木陰から抜け出し Birkin の行為を止めさせる。

次に二人の自我の主張が始まる。Ursula は Birkin が少しも彼女に奉仕してくれないので、彼のことを自己中心的だと攻撃する。愛していれば奉仕出来る筈だと考える Ursula は、「あなたは私に仕えてくれることは望まない。ただ自己中心的なだけよ。ただ自分自身を求めているだけなの」と怒るが、彼女にその「自己主張の意志、恐怖に襲われた様な直観的な自己主張を投げ捨てる事を望む」Birkin は、「僕は君の女性的自我などに少しも価値を認めない」と反撃する。だが、ここでは結局二人は「柔く、静かに、平和に」手を握り合つた。

一方、Birkin の例の「シベール、云々」の一節は有名な箇所で、色々な批評家が、様々な解釈をしている。Harry T. Moore は白い月影を抽象による破壊の象徴と解し、Gerald の性格と結びつけており、J. M. Murry が次の様に解釈しているのは、Lawrence が Skrebensky の化身であるという文句を除いて、妥当な解釈といえよう――

Birkin is destroying Aphrodite, the divinity under whose cold light Ursula annihilated the core of intrinsic male in Lawrence's last incarnation as Skrebensky.<sup>(注22)</sup>

バーキンは神なるアフロディテを破壊しているのである。というのはその冷たい光の下でアーシュラはスクレベンスキーとしてのロレンスの最後の化身に於ける本質的な男性の核心を根滅させたからであった。  
(筆者訳)

また、Graham Hough は作者の神話を古臭いとしながらもこう言っている――

…but it is clear enough that the moon is the white goddess, the primal woman image, das ewig weibliche, by whom he is obviously haunted.<sup>(注23)</sup>

だが、月は白い女神であり、主要な女性の象徴であり、永遠なる女性であり、それに彼が明らかにつきまとわれて悩まされているという事は明々白々である。  
(筆者訳)

結局のところ、Birkin (即ち、作者 Lawrence) は、Ursula を含めた女性すべて、彼が Magna Mater と呼んでいる女性すべてに、自分ではどうしようもない深い恐怖心を抱いているのであろう。

如何に女性に恐怖を感じている Birkin であろうとも、William や Anton とは違って、彼は女性の自我には絶対に屈服しようとはしない。それ故、口論が絶えない。第二十三章 “Excuse” でも始まる。ここでも、Birkin は Ursula が未だ彼の理想とする様な存在には、程遠いことを知る。人が個人的感情を捨て、偏頗のない中立の状態になった時、情熱の深淵が出来るのだが、Urula はまだ情熱的個性的段階におり、常にいやになる程個性的なのである。彼は男女関係の理想的状態を星座に例える。第十三章で言う「人は誰かとの結合に身を委ねなければならないのです。一永遠に。だがそれは滅私という事ではありません――それはわれを、神秘的な均衡と全体性によって保持する事です――星が他の星と均衡を保っているように」と。また第十六章ではこう考える――

We are not broken fragments of one whole. Rather we are the singling away into purity and clear being, of things that were mixed. Rather the sex is that which remains

in us of the mixed, the unresolved. And passion is the further separating of this mixture, that which is manly being taken into the being of the man, that which is womanly passing to the woman, till the two are clear and whole as angels, the admixture of sex in the highest sense surpassed, leaving two single beings constellated together like two stars.

われわれは一つの完全なものの破片ではないのだ。われわれはむしろ混合されたものから、純粹で明確なものへ選りぬかれた存在なのだ。性はむしろわれわれのなかの混合され、分解されていないものなかに残っているものなのだ。そして情熱はこの混合物をさらに分解し、男性的なものは男性に、女性的なものは女性のなかへ引き渡し、その両者が明確に、完全に、それぞれ天使のようなものになるまでにし、性の混合物を最高の意味で凌駕し、二つの個々の存在を星座の二つの星のように配置するものである。

(伊藤整訳)

Ursula は、「あらゆる男が訪れねばならぬ子宫、誕生の湯ぶね」として、男性を屈服させ様としている彼は考え、これに対抗する。だがこういう彼も、色々の口論や話し合いの結果、お互の気持が通じたと思ったのか、二人の波長がぴったり合っていて、離れる事が出来なくなったのか、結局二人は結ばれ、自我と自我の激しい闘争は均衡を得、愛の法悦を享受する様になる。

Lawrence は Frieda との実生活で完全な人間関係は、いい加減な妥協より激しい闘争によって得られるものだということを学び、それが彼の信条となった。それ故、Birkin—Ursula の関係も熾烈な闘争の後平安な満足した時が来る。が、それも長く続かずエゴとエゴとがぶつかり合い、憎悪へと向う。激しい闘いの後の平和。平和—憎悪—闘争—平和という円を描いて恋愛が展開し、徐々にその円が中心に向って小さくなつてゆき、完全な人間関係へと収束してゆくのである。これが上で述べた Birkin 達の愛の法悦を意味する筈であるが、この場合少し違うように思われる。即ちここでは Birkin と Ursula は単に和解しただけで、Birkin の説く男女関係の理想状態には程遠い様である。結局 Birkin (=Lawrence) の求める理想状態を或る程度強引に作ってしまったのは自分の見はてぬ夢を実現させたいという作者 Lawrence の願望意識の強さの表われであろう。この不充分な状態に満足出来ず、Lawrence はこの後の作品で別な思想を展開せることになる。

Birkin の前の恋人は、現代女性によく見られるエゴイズムに蝕まれている、知的で上品振った女 Hermione である。彼女は自分自身を、すべての男が訪れねばならぬ「完全な理想」と見ており、常に自分の意志を他に押しつけようとする。彼女は支配的な意志力と内的な弱さを持っているという点で、Gerald の女性版である。Birkin は Hermione の事も病氣の間考えた――

Did he not know it (the Great Mother) in Hermione. Hermione, the humble, the subservient, what was she all the while but the Mater Dolorosa, in her subservience, claiming with horrible, insidious arrogance and female tyranny, her own again, claiming back the man she had borne in suffering. By her very suffering and humility she bound her son with chains, she held him her everlasting prisoner.

(Chap. XVI)

彼はハーミオーニのなかにもそれを見なかつただろうか？ つつましく、従属的なハーミオーニ、彼女はいつだって悲しみの母以外のなんであつたろうか？ 彼女はその追従のなかで、恐ろしい、陰険な傲慢さと女の専横をさもって、彼女自身のものを、彼女が苦しみながら生んだものとして男を、ふたたび要求していた。まさに彼女の苦しみと謙遜さによって、彼女はその息子を鎖で繋ぎ、彼をその永遠の獄囚にしてしまうのだ。

(伊藤整訳)

彼女は Ursula の様に真正面から自我を押しつけてくるのではなく、愛とか自己放棄とかいった搦め手からくる。当然 Ursula は Hermione を是認出来ない。Hermione は自分の自我を尊重してくれれば、男の奴隸になることも厭わないという、女性を裏切る行為をしていると批難する。Birkin はこの Hermione の行為は現代女性のエゴイズムに過ぎないとし、自分に得心の行く様な理由を見つけ、彼女を棄ててかえりみない。

一方、Hermione にしてみれば、Birkin は彼女がいくら自分の自我を押しつけても、殆んど何の反応も示さない堅固な壁を感じられるのであった。この壁を打ち破らなければ、彼女の自我は何処へも行けず、出口を失って、恐怖にとり囮まれ、恐しい死に方をしなければならない。彼は想像も及ばぬ邪悪な障壁となっている彼を意識した。ある日その壁を打ち破る事を無意識に思い浮ぶと、これから肉欲の絶頂をきわめようとする様な恍惚状態に入る。その瞬間、Birkin の頭に瑠璃玉の文鎮を全力で打ちおろしたが失敗した。彼の死によってのみ、彼女の自我は自らの自由になりえるのであった。彼女は Ursula とは逆の女であった。

この小説でもう一つの重要な恋愛関係は、Gerald—Gudrun のそれである。この恋愛関係の展開は、Birkin—Ursula のそれに劣らず重要で、この二組の恋愛関係が表裏一体となって、この小説の筋を構成しているのである。その為、Gerald—Gudrun の恋愛に破局が訪れる迄の一部始終が語られるのだが、その破局の様々な理由として、作者 Lawrence は Gerald の為人を充分に描いて、明らかにしている。

即ち、Gerald という人物は、機械的な現代の生活のなかでの意志の力、人格、理念をかざして、他の人間達や世界を秩序付け様とするのである。彼は深い情緒や、真摯な人間関係や愛情を抱く能力に欠けている。行動的知的支配の人間として、女性を征服し、または父 Thomas Crich が温情主義・人道主義的経営法をとった為、事業に失敗している時、父の後を継ぎ、坑夫を道具と使い自らは機械の神となって、事業を再興する。慈善、ヒューマニズム過多、個人的喜怒哀楽などの感情をおさえ、物質を征服することに心血をそそぎ、メカニズムを神とし、自身その神となり、システムそのものとなる。冷酷な意志力の成果であった。だが、この炭坑経営者としての彼の成功は、見せかけに過ぎないのである。彼は本質的には弱いのだ。彼の弱さは性に対する態度の誤りに起因し、聖なる神秘のエロスを崇拜する事が出来ないという性質に結びついているとされている。一方、Gudrun はロンドンで美術学校の生徒として、絵の修業をして、自由な強制されることのない芸術家らしい生活を数年間過してきた、教師をしている知的な女性である。この様な二人が恋愛関係におち入ると、最後には破局の憂き目を見ると、作者 Lawrence は考えるのである。

Gerald の意志力と冷徹な理知とは、機械万能の人間的な心のない物質文明社会に於いてこそ、

成功をもたらすものであるが、人対人の結びつきである恋愛の場では、破壊をもたらす。Birkin も Gerald も共に愛というものを否定するが、Birkin はそれを超えるというかたちで、Gerald は自分の意志を相手に押しつけるというかたちで否定する。意志の相手への押しつけとは彼と Gudrun の場合、自己を放棄し相手に依存するということになる。これでは眞の人と人との結合とはなり得ない。孤立した孤独な人間が、益々離れてゆき自己の殻に閉じってしまう。決してその孤独を打破して結びつく事は出来ない。

こういう Gerald 達の恋愛は、相手に依存するか、相手を支配するかどちらかとなる。自分を捨てて、相手の機嫌を取り結んで唯々諾々とした態度を保持するか、又は常に相手に対して自分の要求を押しつけ、相手の自我を無視し、自分の支配下に置くかどちらかということである。即ち、一方による他方の征服となる。相手に常に要求をつきつける支配者は強そうに見え、相手は「自己を見失って弱った風の様に地上を低く這いまわっている」。この立場は何度も入れ代る。相手が存在する為にこちらが滅び、相手が否決されるところが認められるという状態となる。

彼が自己を保つ為には、女の気嫌取りをやめて、女から離れればいい。だが離れようとすると自分が空しい存在となってしまう。眞の意味での完結し充足した自我とは、孤立した断片的存在ではなく、他と結びついた時初めて自己主張し得る。しかし彼はこれと逆の状態におちいる。物質社会では成功した彼も孤独に堪え切れず、女の気嫌を取り続ける。行きつく所のない堂々めぐりである。解決法はただ一つ、女と自分のどちらかが死ぬ事である。アルプスの雪の中が、Gerald の最後の場所であった。そこで彼は Gudrun を殺してしまったと思い、雪の中をひたすらさまよい歩いて、凍死してしまう。

Gerald のこの死は中心主題と密接に結びついているのである。Gerald—Gudrun の恋愛関係は、Lawrence の全く容認出来ないものである。Gerald が産業文明の象徴となり、「人生には中心なんか全然なく、人生は社会機構のなかで人為的に作り合わされているのだ」と考える時に、彼のまわりには死の予感があり、その恋愛には崩解が運命づけられている。それを必然的なものにする為に Lawrence は Gerald を物質主義的な産業文明に於いて、父の温情主義的経営法に代わり、冷酷な理性的経営能力を發揮させ、機械文明の神に仕立て上げる。しかし作者は、その間用意周到に、彼が滅亡へ至る道を確実に歩んでいる事を暗示する幾つかの挿話や事件を描き出している。

第四章 “Diver” では、Ursula と Gudrun が見ている所で、Gerald は湖に飛び込み泳ぎ去る。彼は水を自由にし、征服してしまったように描かれる。だが第十四章の “Water-party” では、Crich 家主催のウィリー湖上パーティーが開かれている。そこで事故が起り、そこの娘 Diana が水に落ちそれを助けようとした彼女の夫と共に死ぬ。Gerald はこの二人を助けようと必死の努力をするが無駄に終る。彼の力に余ったのであった。これは彼が常に自分は人間と自然を意のままに支配する能力があると確信している事を合わせて考えると暗示的である。彼の力にも限界は存在するのである。彼は Lawrence の言う偽りの神である機械を信じているからである。

第九章 “Coal-Dust” で、Ursula, Gudrun の Brangwen 姉妹が学校からの帰り道踏み切りのところで、馬に乗った Gerald に会う。その時機関車が来る。彼はこわがる馬を鞭で打ち、静止さ

せようとする。拍車を強く当てた脇腹から血が出る。Ursula は大声でそれをやめる様に言うが、Gerald はそのまま意志を押し通そうとする。この馬は前述の I 型の人物の象徴 (Lawrence の小説では I 型の人物はよく馬と関係を持つ一例 : George 'The White Peacock', Roerke 'Women in Love', Cipriano 'The Plumed Serpent', Gipsy 'The Virgin and the Gipsy' etc.) であり彼の行為は II 型の人物が I 型の人物を支配意志で締めつけ傷つけることを暗示している。

第十二章 'Carpeting' では、Ursula, Gudrun, Birkin が Gerald の馬に対する残酷な仕打ちを非難する。Gerald は自己弁護し、馬に汽車に怯えない様に教えたのだ、そして人間は馬を好きなように使用すべきである、と言う。

第十八章 'Rabbit'(注24)は Gerald と Gudrun の愛のあり方を象徴している。Gudrun は Gerald の邸で妹の Winifred に兎の Bismarck を見せてもらう。Gudrun が兎を捉えようと耳をつかむと兎は大あはれする。彼女が手首を兎の爪で傷だらけにされているところに、Gerald がやって来て兎の首をとっておさえる。兎は抵抗も空しく征服されてしまう。Gerald と Gudrun の関係は、この挿話に象徴され、そこから窺われるものは激しい残忍なものである。強者 Gerald を見る Gudrun の目は、彼のなすままになった生き物の哀願するように目であったが「終局的には彼の勝利者」である者の目であった。それ故、ドイツ人 Loerke に出会い心がひかれると、Gerald を捨てようとして死に追いやってしまう。Lawrence の考えは、産業主義社会で成功する者は表面上如何に強く見えても、内面は弱く、Birkin の求める愛を捉えた愛を得る事は出来ないという事であろう。

Birkin は Gerald の冷たくなった身体を前にして、「彼はぼくを愛すべきだった」と、暗い、殆んど復讐に燃える目で、Ursula を見ながら言う。それはかつて、Birkin が Gerald に腕に小さな傷をつけ、互いの血をその切り口にこすりつけるという、昔ドイツの騎士がした Blutbruderschaft の誓いをする事を提議して断わられたのを意味するのである。これは Lawrence が理想境 Rananim(注25)の建設と共に、J. M. Murry に提案した「血の盟友」の事である。

この誓いは、'Gladiatorial' と題する第二十二章に呼応し、Birkin の思想の根底ともなっている。ここで、Birkin と Gerald は Gerald の室で裸になり、日本のレスリング、即ち柔道をし、肉体的に接触する事で、今迄知的、精神的に親しかったのに加えて、肉体的にも親しくなったとするのである。この行為は一種の Blutbruderschaft だとされている。そしてこういう誓いによってこそ、Gerald が女から離れても、自己を保つ事が出来るのだと暗示されている。男性が女性との関係に掛り切りになると、やがて女性が男性を征服し、女性への奉仕者たらしめる様になり、遂には自我を失った空虚な存在にしてしまう。こういう事を避けるには、男性は女性から独立していくなければならない。Gerald の様な自己というものを持たない男は、他の男性と結合する事によって、孤独から救われる所以である。現代に於いて、男性が自分の自我を保持出来るのはこれ以外途はない。結局、Birkin が Gerald と深い友情をあれ程強く求めたのは、男と女との関係の上に於いてのみでは、生きてゆく事が出来ないと感じているからだったのである。

その事は、この小説の結果の Birkin と Ursula との対話に暗示されている――

“Did you need Gerald? she asked one evening.

“Yes,” he said.

“Aren’t I enough for you?” she asked.

“No,” he said. “You are enough for me, as far as a woman is concerned. You are all women to me. But I wanted a man friend, as eternal as you and I are eternal.”

“Why aren’t I enough?” she said. “You are enough for me. I don’t want anybody else but you. Why isn’t it the same with you?”

“Having you, I can live all my life without anybody else, any other sheer intimacy. But to make it complete, really happy, I wanted eternal union with a man too : another kind of love,” he said.

“I don’t believe it,” she said. “It’s an obstinacy, a theory, a perversity.”

“Well—” he said.

“You can’t have two kinds of love. Why should you!”

“It seems as if I can’t,” he said. “Yet I wanted it.”

“You can’t have it, because it’s false, impossible,” she said.

“I don’t believe that,” he answered.

「あなたにはジェラルドが必要だったの？」とある晩、彼女は訊いた。

「そうだ」と彼は言った。

「わたしだけでは十分でないの？」と彼女は訊いた。

「いや」と彼は言った。「女に関するかぎりは、ぼくはきみで十分なのだ。ぼくにとって、きみはすべての女だ。しかし、ぼくは、男の友だちにも、きみとぼくとの永遠の性と同じものをもった人間がほしかった」

「なぜわたしで十分ではないの？」と彼女は言った。「あなたでわたしは十分なの。わたしはあなた以外には誰もほしくはない。なぜあなたはそうでないの？」

「きみがいれば、ぼくは他の誰もなしに、他のいかなる絶対的親密性もなしに、全生涯を生きてゆくことができる。しかしそれを完全なものにするために、ほんとうに幸福になるために、ぼくは一人の男との永遠の結合がほしかったのだ。別な種類の愛だ」と彼は言った。

「わたしはそんなことは信じない」と彼女は言った。「それは頑固な言い方たよ、理屈、強情よ」

「まあ一」と彼は言った。

「あなたは二種類の愛をもつことはできないわ。なぜもつべきなの！」

「ぼくにはできそうもない」と彼は言った。「しかしほくはそれを望んだのだ」

「あなたはそれをもつことはできないわ。それは間違いだし、不可能だからよ」と彼女は言った。

「ぼくはそら思はない」と彼は答えた。

(伊藤整訳)

この思想はやがて、*Fantasia of the Unconscious* で体系的に完成される Lawrence の性の哲

であった。

### 注

注 1) E.T., *D.H.Lawrence : A Personal Record*. London : Fank Cass ; second edition 1965. p.103

注 2) 「ロレンス」,「世界の文学」第三十四卷, 中央公論社, 1966年。付録の「読書の手引き」。

「Nethermere は Nether と mere の合成語で, Nether は『下』, mere は『池』の意味。又, mere はフランス語の *mère* として『母』の意味である。だから Nethermere は『母の(支配の)下』という意味と『池の底』(小説中の George の最後の姿)という意味を隠している。

注 3) Graham Hough, *The Dark Sun*. London : Duckworth, 1956. p.25

注 4) *The Collected Letters of D.H.Lawrence*, Vol. I, London : Heinemann, 1965. p.88, a letter to Edward Garnett. 18 December 1911

注 5) 「侵入者」。八潮出版。1964. p.246

注 6) 西村孝次,「ロレンスの世界」,中央公論社, 1970年。p.21

Sons and Lovers に於いて, 「先ずここでは, 息子も恋人も, 複数形で用いられている。これは, 一般的・普遍的な真理や慣習を表わす為である。つまり, ポールとその母親は, 単に特定の親子をではなく, 同時に多くの息子と多くの母親を代表しているわけである。つぎに, 『息子と恋人』の『と』はふたつの別個のものをつなぎ合せるときの等位接続詞ではなく, 同時・組合せ・付隨・接触などの一体になった関係を表わすものであって, 母親にとって息子であるとともにまた恋人でもある, という意味である」

注 7) E.T., op. cit., p.211.

He(Lawrence)knew I must be hurt, and thought I should be furiously angry. What he did not understand was that the hurt went deeper than any anger. It went down to the roots of my feeling for him and altered my conception of his nature.

彼は私が傷ついたのを知っていて、私がひどく怒っていると思っていた。彼は、その傷がどんな怒りより深いものだという事を理解しなかったのでした。それは彼に対する私の感情の根底へ迄及び、彼の性質についての私の概念を変えてしまったのでした。（筆者訳）

注 8) 中橋一夫,「D.H. Lawrence」研究社。1970 pp. 33—34

注 9) *Letters*. p.160. To Edward Garnett, 14 November 1912

注10) Claudia C. Morrison, *Freud and the Critic*, The Univ. of North Carolina Press : p.139

注11) Miriam が Paul への恋人をはっきりと、自分の心に感じたのと、妻 Frieda が Lawrence を愛しているのを心に認める場面は酷似している。

Miriam の場合——Paul が Willey 牧場の仲間達との遠足の帰り道、皆におくれて一人道に立ち止って、兄 William のものであった傘がこわれてしまったのを直しているところに、やはりおくれていた Miriam が追いつき、彼の行為を見守る——

He remained concentrated in the midle of the road. Beyond, one rift of rich gold in the colourless grey evening seemed to make him stand out in dark relief. She saw him, slender and firm, as if the setting sun had given him to her. A deep pain took hold of her, and

she knw she must love him. And she had discoved him...discovered his loneliness. Quivering as at some "annunciation," she went slowly forward. (Chap. VII)

彼は道のまん中で熱心に何かをしていた。彼の向こうのほうでは、どんよりとした、灰色の夕空の、一か所が切れて、そこから見える明るい金色の空があり、彼の姿を黒い浮き彫りにして見せていた。彼女は、細いが、しっかりしたからだつきのポールを、落日が自分に与えてくれたように思った。深い痛みが彼女の心にわき、彼女はポールを愛さなければならないのだと感じた。そして彼女は、彼という人間、…(中略)…彼の孤独さを発見したのだ。何かの「お告げ」を聞いたかのように、彼女は震えながらポールに近よった。

(伊藤整訳)

Frieda の場合—Frieda と面識を持って、幾日か後の或る日、Lawrence と彼女は彼女の子供を連れて散歩に出た。彼は小川のほとりで子供を相手に熱心に遊んでいた。彼女は言う——

Suddenly I knew I loved him. He had touched a new tenderness in me. After that, things happened quickly. ("Not I, But The Wind...", Frieda Lawrence, Cedric Chivers, 1973. p.5)

突然、私は自分が彼を愛しているのを知りました。彼は私の新しいやさしさに触れたのでした。

その後、事は急速に進みました。

(筆者訳)

注12) 実際の恋人 Jessie Chambers に Lawrence はこれと酷似した手紙を彼女の二十一歳の誕生日にやっている。

"When I look at you, what I see is not the kissable and embraceable part of you, although it is so fine look at, with the silken toss of hair curling over your ears. What I see is the deep spirit within. That I love and can go on loving all my life... Look, you are a nun, I give you what I would give a holy nun. So you must let me marry a woman I can kiss and embrace and make the mother of my children.

(E.T., op. cit., p.139)

「君を見る時、僕に見えるのは、耳の上でカールしている髪の毛が絹のように波打っているのを見るのはすばらしいけれど、接吻したり抱擁したりする事の出来る君ではないのです。僕に見えるのは君の心の中の深い精神なのです。それを僕は愛して一生愛し続けていけるでしょう…本当に、君は尼です。僕は聖なる尼に与えるようなものを君に与えます。だから、僕に接吻も抱擁も出来、僕の子供の母親になる事の出来る女性と結婚させて下さい」

(筆者訳)

注13) E.T., op. cit., p.186. "They tore me from you, the love of my life...It was the slaughter of the foetus in the womb." 「みんながぼくを君から引き離したんだ、我が命の恋人をね…。まさにまだ胎内にいる子を虐殺したようなものだ…。」と書いた紙を Jessie は Lawrence から受け取っている。

注14) 伊藤整・永松定訳「D.H. ロレンスの手紙」 弥生書房 1971年 p.87.

注15) Harry T. Moore, *The Life and Works of D.H. Lawrence*. London, Unnwin, 1963. p.83

...the last word in the book, 'quickly'—in the sentence in which Paul turns away from the darkness and walks 'towards the faintly humming, glowing town, quickly'—is not intended to signify *rapidly* but is rather used in Lawrence's favourite way to mean *lively*. The last word in *Sons and Lovers* is an adverb attesting not only the hero's desire to live but also his deep ability to do so. But this was implicit from the first, for through all the book's

trials and sorrows, Paul's consciousness has remained 'quick'.

……ポールは暗やみの方向へは向わなかった、そして「かすかな騒音を伝えてくる、明るい町の方へ足ばやに」歩いていくという文章の中の——この本の中の最後の語「足ばやに」というのは、「すばやく」を意味しようと意図されているのではなく、むしろ、ロレンスのお気に入りの方法で、「生き生きと」を意味するように使われている。「息子と恋人」の最後の語は単に主人公の生きようとする欲望のみならず、そうしようとする彼の深い能力を証拠立てている副詞である。しかしこれは最初から含蓄のあるものであった。というのは、この本のあらゆる試練と悲しみを通して、ポールの意識は相変らず「生き生き」としていたからである。

(筆者訳)

注16) *Letters*. p.132 To Edward Garnett, 29 June 1912

注17) *Letters*. p.180 To Ernest Collings, 17 January 1913.

注18) *Letters*. p.189 To Ernest Collings, 24 February 1913.

注19) 関根正雄訳「旧約聖書 創世記」岩波文庫 1977年 第9章13~15節 p.28

注20) マーク・スピルカ著・山口圭三郎訳「愛の倫理」—D.H. ロレンス研究— 篠崎書林 1971年 p.144

注21) Graham Hough, op. cit., p.73

注22) Harry T. Moore, op. cit., p.122

注23) Graham Hough, op. cit. p.79

注24) スピルカ, op. cit., p.196

このうさぎこそ、少女ウィニフレッド・クライチが「神秘的な存在」と評価する、「もがき苦しむ生命の塊り」の象徴なのだ。ところで二人とも、うさぎを鎮めようとして、ひどく引っかかる。小さな内庭にうさぎが狂ったように飛び出すと、二人はうさぎをあざけり、腕のひどい傷を互いに見せ合い、この後に確実に起るであろう「忌まわしい神秘の世界」に一步足を踏み入れながら、みだらな笑顔を浮べる。これこそ、二人の魂に波のごとく、打ち寄せそれを引き裂き結局最後はジェラルドの死によって終止符を打つことになる、激しい二人の未来に対して彼らの間に結ばれたきずなであり、同盟の誓いなのである。

注25) D.H. ローレンス著・羽矢謙一訳 「愛と生の倫理」 南雲堂 1971年 pp.159~160 その理想郷は、旧約の詩篇三十三篇一節の「ただしきものよエホバによりてよろこべ」というヘブライ語の文句からとて、「ラナニム」と命名された。(解説に加えて)

尚、上の文句はヘブライ語では “Ranani Sadekim Badonoi”，また英語では “Rejoice in the Lord, O ye righteous”。

(本学講師=英語担当)